

## シンポジウム開会のご挨拶と趣旨

(永田)

皆さま、こんにちは。未来の図書館 研究所の永田でございます。シンポジウムの開始にあたって、一言ご挨拶を申し上げます。公共図書館の今後にこだわってこのようなシンポジウムを開催してまいりました。おかげさまで、今年で3回目になります。大勢の方にご参集いただき、大変嬉しく存じます。皆さまのご支援ご協力に感謝いたします。

公共図書館が社会の革新を担う機関であるということで、昨年度はソーシャルイノベーションという切り口から、社会企業といわれる事業を話題にいたしました。今回も同じようなスタンスであります。公共組織と連携する動き、あるいは公共組織そのものの動きを取り上げます。

本日はお二方をお招きしています。岩手県の紫波町で公民連携を成功させている、オガールプラザ株式会社の代表取締役の岡崎さんと、塩尻市にあります「えんぱーく」という施設で初代図書館長をなさった内野さん、このお二方でございます。それぞれの領域できらめくようなご活躍のお二方でありまして、お忙しい中お越しいただいております。

お二人についてのご紹介には、たくさんの言葉を並べなければなりません。時間の関係からお手元の資料をお目通しいただくということで、割愛させていただきます。ご参照ください。お二方のお話をお聴きしようということで、はせ参じていらっしゃる方がたくさんご着席なさっております。早速シンポジウムを始めたいと思います。どうか終了のお時間までお楽しみください。

挨拶はここまでにいたしまして、これからはコーディネーターとしての役割を少し果たしたいと思えます。まずは、シンポジウムの趣旨について少し述べさせていただきます。ちょっと着席させていただきます。

このテーマのきっかけは、実は7~8年前の「近年英国でなくなってしまうものは地域の図書館と地元のパブだ」といった友人の嘆きのような諦めのような言葉でした。時代が変わりゆく中、これまでのような公共図書館のあり方は持続し得ないだろうという思いがありました。英国は、アメリカと並んで公共図書館が早くから発達した国です。しかし昨今、公共図書館の数が激減しています。ただ図書館数の数え方は込み入っておりまして、政府の発表とBBCの発表とは少し異なったりして議論にもなりました。図書館団体であるCILIPによれば、2018年現在の図書館の数は3,850ということになっています。しかしこの10年間に、穏やかに見積もっても700以上の図書館あるいはサービスポイントがなくなっています。

英国では法によって、公共図書館サービスは住民に提供されなければならないということになっていますので、閉館に際しては住民訴訟が起こされることも多々ございます。この写真は、イングランド北部のダーリントンという市にある図書館です。御覧のとおり、ヴィクトリア朝のかなり由緒のある歴史的建物です。この図書館を廃止するという市の決定に対して訴訟が起きて、実は住民が訴訟に負けてしまったのですが、その後市長が廃止撤回し、これは幸い今でも残っています。しかし、全国的には多くの図書館が閉館され、それとともに、図書館員の数も激減していますし、1年間に1回でも図書館を訪問した方々の人口比は、以前50%くらいあったものが、今は35%まで下がってしまいました。人々が図書館というものから少し離れ始めています。こちらの方が、図書館の数の減少よりも深刻かもしれません。

わが国では、ご承知のように図書館に関しては後進国といわれている状態が続いていましたので、図書館の数はずっと右肩上がり、現在でもわずかながら右肩上がりなのです。しかしわが国の図書館の整備状況は、英国のような状態に一度も至っておりません。そして、ずっと上り調子だった図書館の状況ですが、資料費が2010年に下がりました、そこから利用状況も下降しています。

英国や私どもの足元で、こんな動きが定着しつつあるということで、端的にいつてしまえば、これまでの図書館の枠組みというものが、維持できなくなっていくかもしれません。

こうした状況の原因の1つは、予算カットであります。それは、これまでの制度を維持してきた経済成長が、もはや先進国では見込めなくなったということの意味しております。もちろん理由はそれだけではなくて、その他いろんな理由が考えられます。時代の進展にまつわる様々な変化、例えば情報のデジタル化や利用者の生活行動の変化があります。そういった事柄が複合的に状況をつくっている。あるいはまた、時には図書館経営そのものがうまくいっていないというケースもないとはいえません。このあたりで、きちんと問題を見極めておく必要があると思います。

時代の変化に対しては、何らかの行動をわれわれも起こしていかなければなりません。まずは、人々がこのような社会変化に対応できるような支援、人々の技術や知識の更新するための支援、つまり生涯学習の推進が要請されています。図書館の第一の課題領域です。また、新自由主義といいますか、個人人の活動を優先する風潮から、壊れてしまったコミュニティの人々のつながりをつなぎ直していくというようなことも、近年図書館の役割としてあげられるようになっていきます。ということで、図書館が果たすべき役割は、実は非常に大きくなっているといえます。

そこでこの図書館の状況を、どのように打開したらよいかを考える切り口として、今年にはサステナビリティという観点をとりあげました。今後とも公共図書館という社会的な枠組みは維持できるのか、サステナブルな図書館とは、どのようにサービスを運営するものなのかなどについて、考えてみたいと思います。

サステナビリティという横文字をカタカナにした言葉を使っていますので、それが一般にどのように使われているか確かめてみました。インターネットで検索をかけますとサステナビリティに関するウェブサイトがいっぱい出現します。その中で私が気に入った定義はこれでした。「サステナビリティとは、環境や経済、社会のバランスを考えて、世の中全体を持続可能な状態にするという考え方」というものです。このように環境、経済、社会という視点から見ると割と把握しやすいのかなということで、この定義が気に入っております。

またサステナビリティという言葉で、状況を意味する場合もありますが、行動規範や考え方を意味するケースもあります。皆さまも最近このようなロゴをご覧になったことはあるかと思いますが、2016～2030年の15年の間で、達成するために掲げた持続可能な開発目標です。それをSDGs (Sustainable Development Goals) といいます。「ピコ太郎×外務省 SDGs」という動画をご覧になった方もいらっしゃるかもしれません。2015年9月に国連のサミットで採択された17のグローバル目標で、われわれのあるべき行方をさしているといえます。

図書館ではこのサステナビリティという言葉はどのような場面で使われているかということ、IFLA (国際図書館連盟) という団体がございますね、このIFLAでは2009年に「環境、サステナビリティと図書館」ということをテーマにしたインタレスト・グループを構成しました。このグループが毎年総会の際に会合を開いて図書館におけるサステナビリティについて話し合っています。それから、先ほど申しま

した SDGs を策定する際に、IFLA は積極的に関与しております。

そうした活動では、これまで主に環境志向といえますが、環境に対する配慮を主に掲げておられ、実は経済的あるいは社会的面から、図書館そのもののサステナビリティを問題にしているケースは多くありません。しかし、図書館存続が厳しい状況になってくると、そのもののサステナビリティは避けられない問題です。例えば英国では、この観点から図書館の状況を変えていこうという政策文書を、政府（エージェンシー）が出しています。コストを削減したり、他のコミュニティサービスと統合したりして運営するなど、図書館を持続可能な形で維持していこうという内容です。昨年出された『英国図書館の展望』では、『持続可能な、コミュニティ中心のサービスを提供するためのガイド』というものがついておられて、「サステナブル」という言葉が散見されます。

さて、本日のテーマは図書館をサステナビリティの観点からさまざまに考えてみようというものです。図書館は、その役割が人々から認められ、組織として十分に活動し、世の中全体を持続可能な状態にしていくことに寄与すれば、サステナブルなものとなりましょう。このことが議論の前提となります。

そこで、サステナブルな公共図書館をおつくりになったお二方から、お話をいただきます。まず岡崎さんからは、「エリア価値を高める図書館」というお話をさせていただきます。これは、先ほどのサステナビリティの3つの視点からいえば、主に組織の経済的な視点からのお話であります。次に、サステナブルな公共図書館のサービスを、塩尻市のえんぱ一くで展開された内野さんには、「図書館をまちのたからものにするには」というお話をいただきます。こちらはどちらかといえば、まちのあり方、つまり社会的視点に重心をおいたお話になるかと思えます。それでは、ここで早速岡崎さんにお話を頂戴して、シンポジウムの本題に入りたいと思います。

---